

レヴェレーションに関する一考察

百 岡 胤 正

A Consideration on 'Revelation'

TANEMASA MOMOOKA

MENE, MENE, TEKEL, U-PHARSIN.

(Daniel, 5, 25)

バビロンの Belshazzar 王の不信の饗宴の真最中人の手の指が現われて壁の上に書き記したのが上の言葉で、バビロンの国の運命を予言した Revelation である。

我々人間社会に於て雑音の中にも神の声をきくこともあろう、或人はこれをとらえて刺戟を感じ、或人々は知られざるままあたら天来の声を聞いて聞えずということもあろう。

拙稿に於いては、所謂宗教的な意味の Revelation に就いて論じておるのではなく、一般的な意味の Revelation が文学に於て如何に重要な意味をもつかを論じておる。亡霊のことに関して十七世紀の英仏の劇の相違にも一言ふれておいた。

…The plays had to suit the stage conditions, the company and the audience who supported them. Because Shakespeare was a genius, his plays are 'of imagination all compact' full of poetry and philosophy and empirical psychology; but because he was a practical Elizabethan playwright they are also full of wrestling and dancing, broad comedy and smutty jokes, battle and murder and ghosts and apparitions.

—Elizabethan Lit. by H. Morris—

(シェークスピアの) 劇は、舞台の状況に座員の者に、支援してくれる観客に適うものでなければならなかった。シェークスピアは天才であるから、劇は、相像上のものでよくまとまりがあり、詩情も哲理も豊かにとりいれられておる。経験より割り出された心理描写もあるが、実際的なエリザベス朝時代の戯作者である故、其の劇には到る処に、角力あり、舞踏あり、卑しい喜劇あり、下品なしやれも、合戦、殺人、幽霊も、妖怪も、いくらもでてくるのである。

斯う述べておる様に、シェークスピアの劇には亡霊が処々にできて夫々役目を演じておる。マクベスの得意満面の中に催した宴会中に、刺客をして殺めた將軍 Banquo の亡霊が現れて、マクベスの座席に坐ったのである可き空席が無い。同席の者には、亡霊が見えないので空席があると思う。果てはマクベスの言動が合点がゆかない。マクベス夫人の臨機応変の処置でどうやらこの場は事も無くすんだ。Julius Caesar の亡霊も Brutus に現れる。

血が凍り、毛髪が逆立ちおどろく Brutus は、「何者か」とさげふや、亡霊は「汝の悪霊よ」と答え「Philippi に於て再び相見えん」といって消えてしまう。Richard III には、其

の手にかかって殺された者の亡霊が現われ王を呪うのであるが、後日の王に対しての勝利者である Richmond に向っては、祝福をして勝利を得よと告げるのである。この様にシェークスピア劇には、亡霊が現れて、凄さをみせるのであるが、凡そ、ハムレット王子の亡父の幽霊程重要性を有しておるものはあるまい。ハムレット父王の亡霊こそは王子にすべてを reveal して王子がその心に懐く疑惑の雲を一掃さしてくれ、奮起せしめた大切な役目をつとめておる。此の一大悲劇の発展は、ひとえに此の亡霊の Revelation にかかっておる。亡父による Revelation に接する以前の王子は如何であったろうか。亡父の死を悼むの余り、母妃 Gertrude に如何程すゝめられても喪服を脱ごうという気にならなかった。現在の王 Claudius も人の死の自然の理を説ききかして悲哀を忘れさせようとするが容易にきこうともしない。

O God, God,

How weary, stale, flat, and unprofitable
Seem to me all the uses of this world!

(Hamlet, Act I, Scene 2)

おゝ神様 神様、現世のならわしは、何と疲れをおぼえさせ、味気無く、すさまじく、無益に見えることでしょうか。

とさげぶ王子には、世の万事が、不愉快であり、希望ももてない。父の死後、アッという間もなく、叔父と結婚した母の態度には全く不審をおぼえさせるのみである。亡父の気高さに比して現王は何と下品な卑しい者であろうか。亡父にあれ程大事にされ、かわいがられた母は、亡父によく寄り添うておったのに、今では、近親相姦という不倫の行為の快楽に自分を忘れておる有様が、正義の念に燃える若人にはどうにも我慢がならないところである。現王が毎夜の如く催す宴も王子には気に入らない。デンマークの祖国の運命を心配して大いなる義憤を感じておる。王子はこの世の有様を雑草の生いはびこる庭園にたとえておるが、同じことが Richard II のと二人の Gardner と二人の servants との間にとり交される会話の中にも見えておる。Servants は、ただわけもなく健よかなまともな考から土の肥沃を吸いあげてしまう雑草を根こそぎにして除こうとする。Gardner は、更に、Bolingbroke の手によって Richard II が捕えられたとあって、庭師が庭を手入れする様に、王が王国を手際よく処置出来なかったことを慨嘆しておる。ハムレットは自分の心眼で亡父にあったと Horatio に話す中に、父の亡霊の出現のことを耳にする。忙しく王子が友人にきき詳細にきく程に、今夜は自分で亡霊の出現を待ち受けようと決心する王子の態度は正義感に燃える若人に相応しいものがある。亡父の霊の出現するのも若しや不吉の兆でもなからうかと心配する王子は、最初、亡霊の出現に接して、果してこれが悪霊か善霊かと疑いを当然もったのである。王子は、それでも、友人のとめるのを振りきって亡霊の招きに応じて従ってゆく程の勇気があった。王子に reveal されたことは何であったろうか。亡父殺害の場面は余りにも凄惨である。母の不倫は許すまじきことである。終油の秘蹟も授けられず、最後の告白もなし得ずに死んだ亡父の靈魂は傷ましくも、煉獄に於て、浄罪のつぐないをする為に苦しまねばならない。「復仇せよ」と亡霊の命令は至ってきびしい。王子は、Revelation を受けてそのまま内容を鵜呑みにするという慎重さを欠くことはなかった。この Revelation あって以来の王子は、すべてこれに基づいて行動しておる。

亡霊に誓ったにもかかわらず、王子は直ちにそれを実行にまで持ってゆかれなかった。王子

は二幕二場の独白にある如く自らの不甲斐なさを慨いておる。目的を達せむが為めには偽りの狂人ともなる。亡霊の言の正確さを知る為には、劇を演じさして、叔父王 Claudius の臨席を乞い、王の良心の打診を試みて確信に満ちるのである。この Dumbshow によって王の良心はうちこぼたれてしまう。亡霊の言によって母の行為を責める場面にも、再び亡霊が出現して、王子を刺戟して「忘れるな……」というが、母には亡霊の姿が見えず、王子にのみ見えるので母には王子が狂人としか思われぬ。

Claudius 王が祈をささげておる間に、背後に忍び寄った王子は復讐をなしとげようと一度は思ったが、思い直して、祈願中の者を殺したらその者の魂は天国行きとなるから王子の目的は達せられないとばかり、むしろ悪しき行為の快楽にふけておる間に殺して魂を地獄に追いやらむという程復讐の念に燃えており、あく迄も亡霊の言に忠実ならむと努めた。大団円に於て目的を達したが、王子も死んでゆく、母 Gertrude の命は天により裁きされたことは天にまかせよという亡霊の言葉が前以て暗示した様に思われる。

亡霊がこれ程台詞を長たらしく述べることは、一見、少し不自然とは考えられないだろうか、併しエリザベス女王時代の観衆には少くも不自然さを感じさせなかったに相違あるまい。シェークスピアの他の作品にみえる妖精、魔女等も勿論舞台上に容易にうけ入れられるのであるから当時も英国の観衆はよろこんで亡霊をみたのであろうし、長い台詞もきいたろう。J. Dover Wilson も 'Life in Shakespeare's England' の Superstition の章で述べておる様に、この時代の人人は極めて迷信深かったことがわかる。併し、これがフランスの場合、少なくとも Racine の時代の観客には亡霊がむき出しに舞台上に出現する様なことは容易に受け入れることはあるまいと思われる、E. Legouis は Histoire de la Litt Anglaise の de Théâtre jusqu' à Shakespeare の章に次の様に述べておる。

……On s'est plu à montrer la scène anglaise menant à Shakespeare par l'infaillible effet du génie national, un besoin de véhémence, de mouvement, de variété, d'imagination et aussi de brutalité, que le peuple anglais avait dans le sang. Au contraire la France allait à Racine parce que la race était éprise de belles proportions, d'harmonie, de fine analyse et de noblesse.

シェークスピアが、はげしい感情、劇動、変化、相像、それに野卑的なもの——これらのものはすべて英国国民がその血の中に承け継いだものであるが——を舞台の上にのせる様になったのも、結局は、英国国民性の然らしむるところとして、英国の劇がそんな傾向をたどることを喜ぶ様になったからである。これに反して、フランスは、Racine によったのである。これは、フランス国民は、美しい均整に、よいハーモニーに、洗練された分析や、気高さというものに酔っておるからである。

この様に英仏の両国民性の相違がはっきり劇の形式に表われおる。簡単にいえば、シェークスピア劇は、どこまでも人物が多数、筋が複雑で単一ではなく、一応 Racine 劇はひたすらに単一性を用いて描かれておる。それに Racine 劇に於ては、直接亡霊を舞台には上らせぬ。思うに亡霊を舞台の上に現すことは Racine の観客としては良識的に望まぬものと思われる。Lyttton Strachey も Landmarks in French Lit 中の The Age of Louis にて述べ

ておる。

If he wishes to bring before the mind the terrors of nightmare, a single phrase can conjure them up

C'était pendant l'horreur d'une profonde nuit.

Racine が観客の心に夢魔の恐しさをもたらす時、簡単な語句で充分効果をおさめるのである。

深夜の恐怖のおし迫る際であった。

更に、L. Strachey は

...and for the reason he preferred not to produce before the audience the most exciting and disturbing circumstances of his plots, but to present them indirectly, by means of description.

そして同じ理由で、Racine は、観客の眼前にそのプロットの中で最も刺戟を与え、おだやかでない状態のものを展開せしめない様にして、描写という方法で、間接的に表すのである。

とも述べておる。

Athalie は Mathan と Abner の二人に亡母の幽霊の出現にあったことを次の様に述べておる。

ATHALIE.

C'était pendant l'horreur d'une profonde nuit.

Ma mère Jézabel devant moi s'est montrée,

Comme au jour de sa omrt pompeusement parée,

Ses malheurs n'avaient point abattu sa fierté ;

Même elle avait encor cet éclat emprunté

Dont elle eut soin de peindre et d'orner son visage,

495

Pour réparer des ans l'irréparable outrage.

« Tremble, m'a-t-elle dit, fille digne de moi.

Le cruel Dieu des Juifs l'emporte aussi sur toi.

Je te plains de tomber dans ses mains redoutables,

Ma fille. » En achevant ces mots épouvantables,

500

Son ombre vers mon lit a paru se baisser ;

Et moi, je lui tendais les mains pour l'embrasser.

Mais je n'ai plus trouvé qu'un horrible mélange

D'os de chairs meutris, et trainés dans la fange,

Des lambeaux pleins de sang, et des membres affreux

505

Que des chiens dévorants se disputaient entre eux.

ABNER.

Grand Dieu !

ATHALIE.

Dans ce désordre à mes yeux se présente

Un jeune enfant couvert d'une robe éclatante,
Tels qu'on voit des Hébreux les prêtres revêtus.
Sa vue a ranimé mes esprits abattus.

510

(Acte II, Scène V.)

深夜の恐怖の迫る時であった、わが母上の Jézabel はわが眼前に姿を現し給うた。其の死し給いし日の如くおごそかによそおうておられた。母様は数々の不幸にもその誇さえうちこぼたれることなく、光輝を借りてその御顔を粧い飾らむとの御心づかいももち給うた。そのために、如何にもなす能わざる寄る年波のあなどりをものともされぬ御有様でした。

母上は私に申されました。恐れよ、自分はずかしめぬ娘よ、ユダヤの神は狂おしくも汝を圧倒せむとす、娘よ、恐しきその手の中に落ち入るそなたを気の毒に思う。これらのことをいいおえて、亡霊は、わが床に向って身体を低めるかの様に思えた。私はかき抱き参らせむとして両手を差しのべたが、ただ泥沼にひきずりこまれる骨と、傷だらけの肉、血に汚れた肉の魂、みるも恐しげなる手足の雑然とした様相をみるのみであった。犬共は餓えてお互にえさを争うておるのであった。

Abner

嗚呼！

Athalie

此の混惑のさなかに、年若き児の輝くばかりの衣に身を包みわが眼前に姿を現した。飾りたてたヘブライの僧侶の如き有様でした。其の姿をみて打ち萎れしわが心も蘇るが如き思いを致しました。……

Athalie は実際此の子供の温雅なこと、気高いつつましやかさというものにただ感嘆するのみであった。刃で刺された様に感じたくらいであった、はじめは心の迷いとばかり思っておったが、この思いにとりつかれた自分の魂は、此の光景を二度迄も眠りの中にみたのであった。悲しむ其の眼はこの同じ子供が、何時でも Athalie を傷つけむとばかりにしておるのをみたのであった。……

Athalie はこの夢による Revelation あって以来、其の子供のことが気にかかって仕方がない。ハムレット劇は亡父の霊による Revelation によって発展してゆくと同様に、Athalie 劇も母の霊の夢の中の Revelation により展開してゆくのである。Athalie の如何なる策略も効果なく Revelation より啓示された通りのことが実現するの日が来た。

ATHALIE

Dieu des Juifs, tu l'emportes!

(Acte V, Scène vi)

ユダヤ人の神よ、汝の勝利よ

Athalie は絶糾するのであった。David の正統が保たれユダヤの神の勝利は明白であっ

た。

Lytton Strachey は Landmarks in French Lit の Louis XIV の章で述べておる通り、Racine の 'Phèdre' に於て、姫の Phèdre が情熱の極点に達し、失望と悔悟との極にあるの時幻の中に地獄が開いて自分を呑み込まむとするところをみた！亡父 Minos の霊が言葉で表現も出来ない様なその運命を物語るのに接したのである Racine のこの章はギリシヤの Sophocles に比較し得ると Strachey は評しておる。

Minos juge aux enfers tous les pâles humains. 1280

Ah! combien frémira son ombre épouvantée,

Lorsqu'il verra sa fille à ses yeux présentée,

Contrainte d'avouer tant de forfaits divers,

Et des crimes peut-etre inconnus aux enfers!

Que diras-tu, mon père, à ce spectacle horrible? 1285

Je crois voir de ta main tomber l'urne terrible;

Je crois te voir, cherchant un supplice nouveau,

Toi-même de ton sang devenir le bourreau.

Pardonne. Un Dieu cruel a perdu ta famille;

Reconnais sa vengeance aux fureurs de ta fille. 1290

Hélas! du crime affreux dont la honte me suit

Jamais mon triste coeur n'a recueilli le fruit.

Jusqu'au dernier soupir de malheurs poursuivie,

Je rends dans les tourments une pénible vie.

(Acte IV, Scène vi)

Minos は、地獄に於て、蒼白き人々を裁きし給うのです。御自分の娘が眼前に現れるのみ、しかも斯くも数々の邪なことを冥府にても知られざる罪の数々を、余儀なく自白せしめられのを目のあたりにみ給うて、父君 Minos の霊の如何におどろき打ち震い給うことでしょう。この恐しき光景に接して父上、御身は何と仰せられましようか。私は、御身の手から恐しの霊がすべり落ちるのを見たものと存じます。私は御身をみました。御身は新たなる刑罰をさがし求めて、御身御自身血のつながりの者の刑吏となられるのをみました。許し給え、狂おしき一人の神は、御身の家の者を滅亡させ給うたのです。其の復讐の手を御身の娘の狂乱の中に御覧下さいませ。あわれ、わが不仕合せの魂が どこ迄も恥のつきまとう恐しい罪の果実を未だに摘みとらなかつたのです。不幸のため吐く最後の嘆息の時まで追いつめられて、身悶えする苦しみの中、辛き命をながらえますことよ

Virgile の Aeneid VI (422~433) には、Minos が検察官ともいふ可き役を務めて壺を振って、黙する死者を招き、各人の生涯と罪惡とを知るのであると記されてある。Racine はこの一節を上の部分に引用したことは Classiques Larousse の註にみえておる。

このいましめであり Revelatian でもある地獄の状況は Athalie にとってはかなり強いショックであった。冥界の光景は Revelation と関聯がある。ダンテの神曲の地獄篇、煉獄篇、天国篇の三部のいずれもが Revelation である。新約聖書中のヨハネ黙示録は最も雄大なも

のである。ハムレットの亡父の霊も煉獄の存在を認めておる。

Till the foul crimes done in my days of nature
Are burnt and purged away :

(*Hamlet*, Act I, Scene 5)

わが生前の罪のまがごとが焼かれて浄められる迄は

と述べてある。煉獄の内部の状況は筆舌に書し難い程恐ろしいものであることもつたえておる。

Troy の王族 Aeneas にも亡父 Anchises の霊が天より降りたつたとみるや、Jove の命令を受けて来たのであると云って、Aeneas の将来のとり可き行動を示して忠告を与えおいておる。尚、Avernus の深所を通して後日、会见すべきことも告げたのであった。(Aeneid V) 後日、Aeneas は Anchises の霊にあった際天地の動き、の働き等に就いて説いてきかせる心ずかいを示した。Anchises は尚もその息子等の一行のローマの国の偉大なる未来を reveal するのであった。(Aeneid VI) ハムレットの父の亡霊、Athalie の亡母の霊 Anchises の霊のいずれもが、其の子等に Revelation を示しておることは甚だ興味深いことである。ハムレットの亡父の霊も、日本的に言えば、所謂成仏されない迷いの霊が子息に現れて心のこしのことをいったのである。謡曲の敦盛、兼平、八島及び其の他にも解脱をなしかねておる霊が出現しておる。あとで回向によっていずれも成仏をしておる。抜刀中興祖の林崎甚助重信が、出羽国林崎明神の社に参籠し、霊夢によって神明の剣法を悟り、刀術の妙を得たと高野弘正氏は「剣道及剣道史」に於て述べておられるが、Revelation であることはいう迄もない。

Sophocles の King Oedipus にみられる Revelation は、冥界とは関係が無いが、実に、自然に巧に Reveal して筋を運んでゆく、全くゆるみなき作品である。独特の深酷さを示しておることは驚嘆に値する。Thebes の王 Oedipus は、先王 Laius の殺害者を探し出そうとして手を尽しておる。然るに悪病が流行して国の多くの人々は死んでしまうので王の心は暗い、それに先王の死こそ疫病の流行の因でもあるとの神託がある。予言者の Tiresias がよばれて王と話し合う間に怒った王は予言者を罵るので、遂に「御身こそ御身のさがし求める殺害者なり、」と予言者は王に向かって断言する。その上 Jocasta との間に於て近親相姦するという不倫の事実を指摘して王に Reveal するのであった。王は驚きながらも、妃の弟クレオーンの謀略に相違あるまいと疑をさしはさむ。王妃は王を慰安するために、先王 Laius に降りた神託のことを語るのであった。それによると、先王と Jocasta との間に生れた息子は、父親 Laius の殺害者となるという内容のものであった。

Laius 王は道の交るところで盗賊の手にかかって殺されたのであるから Oedipus 王は其の下手人たる筈はあり得ないというのが妃のいうことであつた。それに、先王が其の子供を使の者に山地にすてさせたのであるから三日とは生き延びることはあるまいし、そこでアポロの神も其の子に父親殺しの汚名を着せることはないのだという。斯ういう言葉がかえって益々王の不安を増した。王と妃との問答により次のことがわかる。先王の命を縮めた場所は、Phocis という地名で、Daulia からと Delphi からとの道が一つに合する地点である。時間的に言えば、Oedipus 王が現れて王国を自分のものにした直前である。先王は背は高く、黒い頭髪に白いものがまじり、風采は Oedipus 王に似ておる。斯うして已に reveal されてゆく過去の事実は、恰も薄い紙をはぐ様に知られて来る。先王の一行は全部で五人で、先きぶれが一人、王は車に乗っていた。Oedipus 王にとってはかなり明白となった。殺害の通知者は

ただ一人の生き残りの奴隷であったが、Laius の室に Oedipus がおさまっておるのをみるや、妃の手に触れて、其の場で祈を捧げて、羊群を守ることを頼み Thebes から逃れてなるべく遠くに離れて住んでおる。Oedipus 王は、妃に、自らの身の上話をいうてきかせる。王の父はコリント人 Polybus 母はドリヤ人で Meropè で王子として養育されたが酒宴の席上ずて子だったと罵られて自分の素性を両親にきいても答は得られない。Delphi の神託を得て意外な予言をきく。予言を避ける為、故郷の国と信じておるコリントを去り Thebes の方に赴く途中、先王の殺された二つの道のゆき交る地点に差しかゝったのである。王は Laius 殺害の場面を詳細に話すに至る。ただ盗賊団に殺されたという噂が真実なら王の疑はとけるのである。そこへ、コリントの羊飼がよばれて Oedipus はコリント王 Polybus と親子の關係が全く滯いことを証言する。ここでまたもや、新しいことが reveal されたわけである。それに、其の羊飼が Cithaeron の原野に羊をつれて草をくわす際に幼児を得た。幼児の足の甲に痛のしるしがあつた筈という。Oedipus という名もギリシヤの言葉の *oïdi-mous* で原因は明白である。幼児は Laius の羊飼の手からコリント人の羊飼の手に渡された。Thebes の羊飼もよばれて幼児を例のコリントの羊飼に渡したがその子こそ Laius の家の者であり、その実をいうと妃が子を渡す際に殺すことを命じたことも分明する。コリントの羊飼はこれをあわれんでそのまま故郷へつれかへた。すべてが reveal された。斯くの如く酷な狂ほしい程の Revelation が上昇してすすめられる。Oedipus 王の最初の若しやとも思つてもおらなかつたことが少しづつ疑惑の雲におし包まれて次第に濃くなり遂には、決定的に絶望のどん底に突き落される。王は自らの手で両眼を盲にして、妃は縊死する、Revelation としてこの位巧な構成のものは見当らない。これに比すれば、ハムレットの亡霊が reveal するということは、幼稚な感じを与えるが、いふ迄もなくハムレットの全篇を通して、哲学的、思索的である要素が余りに多くて、幼稚と思われる Revelation を充分補うて余りある。Oedipus 王劇に就いては高津春繁氏は古代ギリシヤ文学史（岩波全書）に於いて次の様に述べられる。

「先王殺害者発見とオイデプスの素性の秘密とにからんだ二つの糸をたぐる王が運命的な自己発見の深淵へと急ぐ。その劇構成には一つの破綻もない。王にも妃にも その弟のクレオンにも誰にも善意のみあって、しかも最後のカタストロフィは不可避免的に近づいて来る、……」

Minos の息女 Phèdre と夫 Thésée との間に次の様な会話がとり交される。

THESEE

……

Il soutient qu'Aricie a son cœur, a sa foi,
Qu'il l'aime.

(Acte IV, Scène iv)

あれ (Hippolyte) が Aricie こそ己の心をとらえ、誠の心をとらえておると申しておる、それに自分もあの女を愛しておると申しておるが、

この言葉をきく Phèdre は、「何と仰せられます」とさげぶが、これ程胸をつぶす驚きの Revelation はない。

PHEDRE, *Seule.*

.....

Hippolyte est sensible, et ne sent rien pour moi!

Aricie a son coeur! Aricie a sa foi!

(Acte IV, Scène v)

イポリットは物のあわれを知っておる。が、この私に対しましては、何の情もかけてくれないというつれなさ。アリスイこそは、イポリットの心を射とめておるのだ、あの方の誠の心を占めておるのだ。

この場面を René Jasinski は Vers Le Vrai Racine に於て次の様に述べる。

テゼーは、その際明言しておる。イポリットはフェードルに対して様々に悪しきことを述べた上に、アリスイを恋しておることを憚らずいうと。この最後の言葉の与える打撃が我慢のならないものであった。たとえ、イポリットのつれないことを許しそのあなどりを認めたところで。註 1

思えば Phèdre にとっては久しい間の邪恋の夢であった。義理の息子の Hippolyte を恋し、召使の Oenone の策略を利用して夫 Thésée の眼をくらまして、果ては天をして Hippolyte を憎ましめ、夫が Neptune に祈り息子を罰する様にしむけるのも、結局は、このあらぬ恋の為めではなかったか、流石の Phèdre もここに於てはじめて其の非を悟るのであるが、Hippolyte が怪物退治に当って落命するその様子をきいて Thésée が Phèdre の勝利よというときに

PHEDRE

Non, Thésée, il faut rompre un injuste silence :

Il faut à votre fils rendre son innocence.

Il n'était point coupable.

(Acte V, Scène vii)

いいえ不正極まる沈黙を破らねばなりません、御身の御息子に無実を帰さねばなりません、あの方は何等の罪とがもございません。

Thésée ははじめて reveal されたことは全く思いがけぬことであった。作者 Racine がしばらく劇作を中止する前の最後のこの作品の終は、Phèdre と夫 Thésée との二人の大なる Revelation によって飾られており、この Revelation に至る迄の構成上の盛り上りは何等のゆるみもない。Phèdre は自らの手で毒死を遂げ、Thésée は Hippolyte の恋人 Aricie を娘代りに育て度いといつて観客の心に救いを与える。これに反して、Oedipus 王の最後の盛り上りは余りにも厳しさがあつて救い難い気持に観客を突き落す。

結末に近く Revelation のもたらす結果に於いて、ギリシャの Oedipus 王と Racine の Phèdre とでは以上の相違が見受けられる。

1) Thésée déclare alors qu'Hippolyte «se répand en injures» contre elle, prétend aimer Aricie. A ce dernier coup, sa volonté

la trahit. Elle pouvait encore accepter l'insensibilité d'Hippolyte, et ses mépris, mais non qu'il en aimât une autre.